

～ 「高・清フレンドリー古道」 ～

第3巻－VIII部

“甦れ、魅惑の古道”『横道』復元化

2023(R5)年9月11日(月)に、山頂上小屋管理者芳賀竹志さんから「甦れ、魅惑の古道“横道”」と称して、是非とも『横道』を復元・復活させたい、との熱い思いを込めた提案が出された。今は藪の横道を復活・復元すれば、(図-1参照)羽黒側月山八合目・肘折・岩根沢・本道寺・志津・姥沢・湯殿山(参籠所)、さらには清川行人小屋などを基点に沢山の「周回ルート・周遊コース」が出来上がる。月山に新しい魅惑のバリエーションルートの拡充となる、月山経由の複線化・円弧往復化が図られる。高清水通り横道分岐目印ふたつこぶ岩から牛首下までは約2km、その先、金姥まで約400mの道のりとなる、所要時間は簡単に推測出来ないが、相応の時間が追加される。月山への滞在時間が長くなる、より長く滞在して貰うことになる、より長い時間ここで散策して貰いご満悦して貰うことになる。多くの不思議がうずもれている「月山ユートピア・ランド」域内を經由し、芳賀さん命名の「センプリの丘」前後からは、眼下に姥ヶ岳を俯瞰し、遠望、手前に朝日連峰、左手後方に飯豊連峰を今以上にくっきりと、真下には四ツ谷川源流部を眺望出来るはずである。

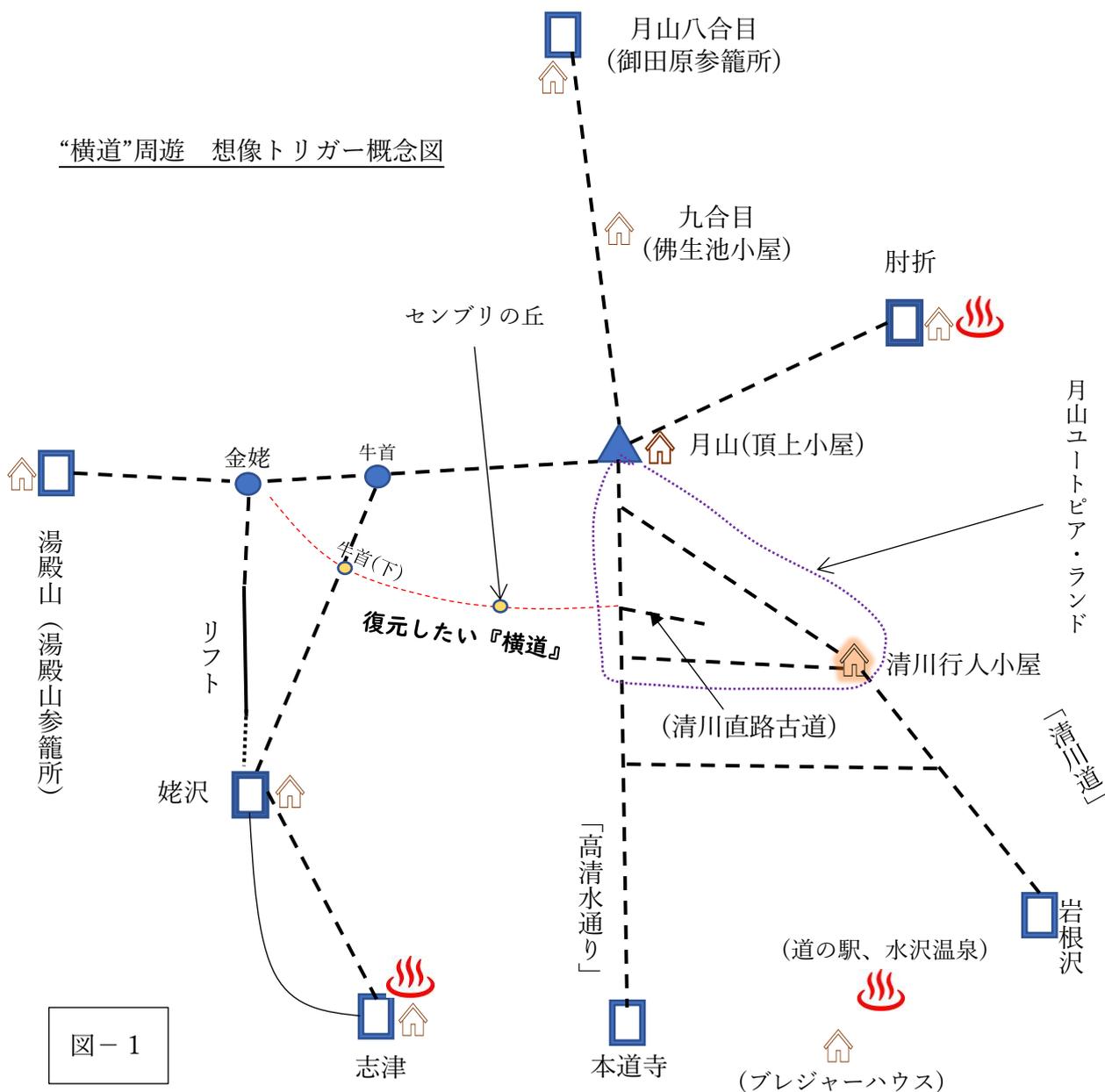
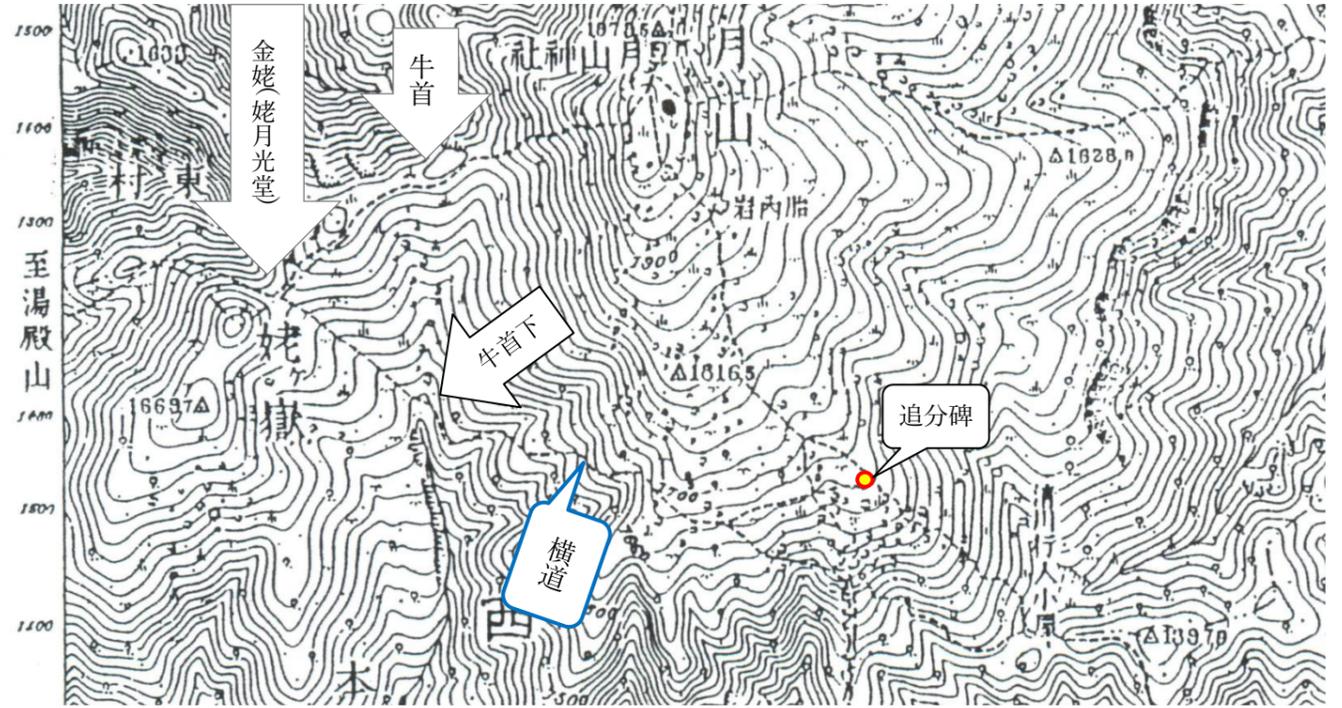


図-1

古来使われて来た「横道」(東西連絡古道)の地図資料を図-2に記載する。



左図は湯殿山論争絵図—寛政4(1792)年頃のもの
牛首と姥沢を直接繋ぐ道は、当時はなかった。



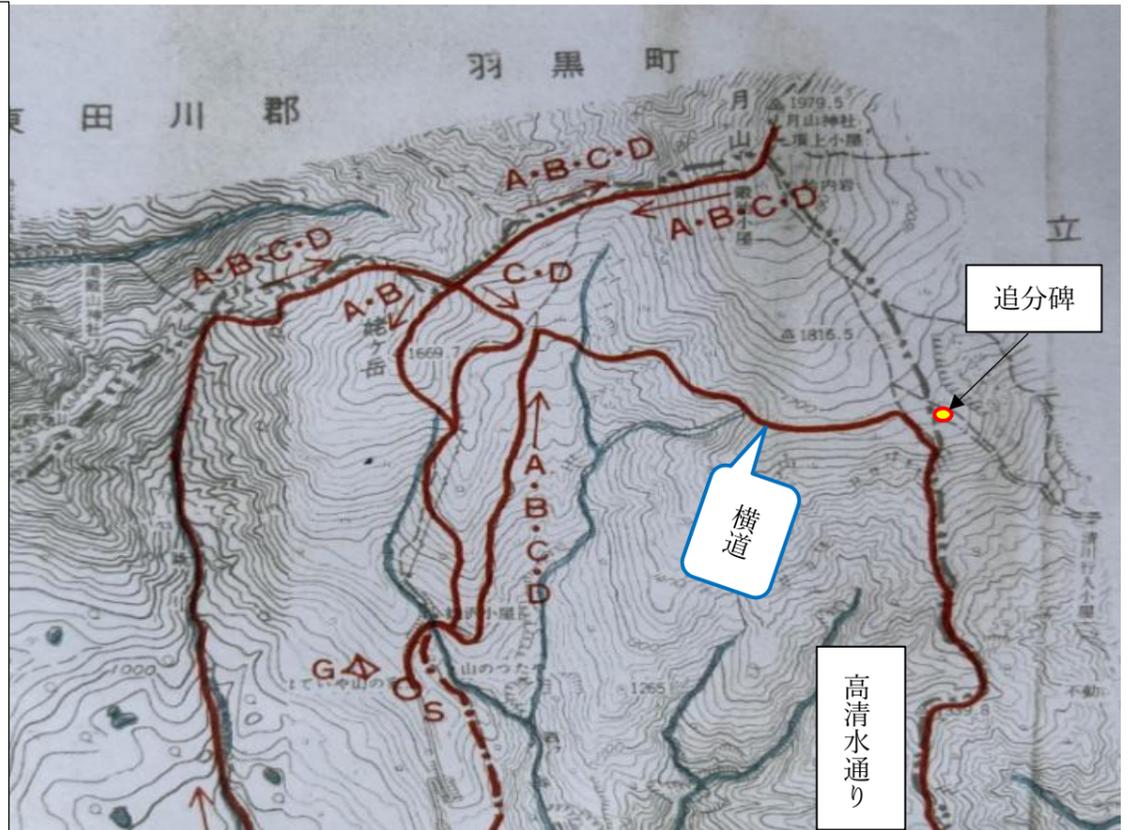
大正二年作成の国土地理院地形図、牛首と姥沢を直接繋ぐ道は、当時はない。



このように、昔から「横道」は重要な参詣道の一つであったのだが、近年は、歩かれなくなった。

図-2

昭和53(1978)年開催高校生第5回東北総合体育大会
山岳競技のために、敷化していた横道を修復した



それではなぜ「横道」を必要としたのか。本道寺から高清水通りに分け入った行者が、および、岩根沢から清川道に分け入った道者が、湯殿山を目指す場合、月山山頂を超えずしてより楽なルートを検討した結果であろう。

ここで、図-4a参照、岩根沢道者に着目すると、往時は清川行人小屋から横道に至る道はここでは清川古道（昔は清川道）を登り、来名戸神で聖俗結界の来名戸神でお参りし、追分碑（左 湯殿山 牛首/右 月山 羽黒山）で左に折れて、今でいう分岐目印二つこぶ岩までの「高・清直路古道」に入り、高清水通りと交差して、その先の「横道」に至ったのである。

図-4bは「清川御所王子社」から見た北方の情景で、来名戸神までの清川古道は余りにも急峻なことから今は藪化してしまった、しかし、踏み跡（道型）は明瞭に残っている。

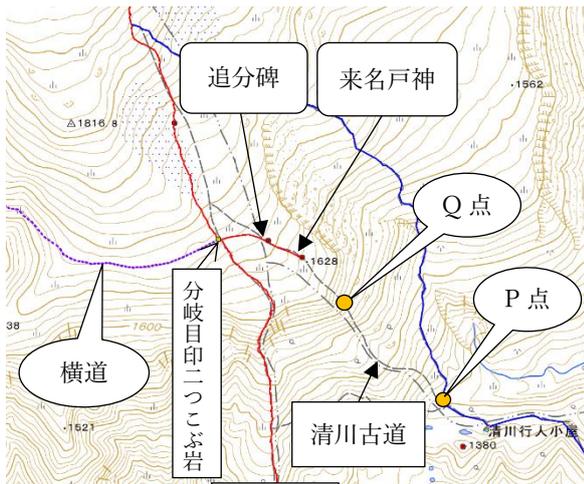


図-4a

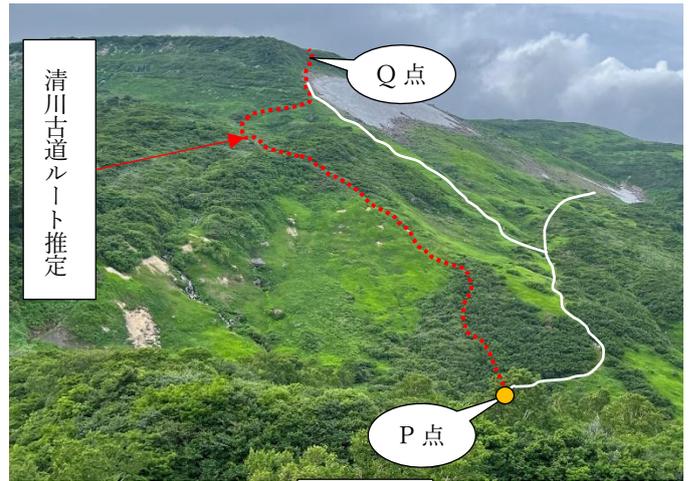


図-4b

(1) 「横道」を利用した歴史上の人物について書籍にみる。

○1；片山正和著「出羽三山山伏の世界」（新人物往来社）P192～P196に次のような興味深い一節がある。「・・・出羽三山の神仏分離は西川須賀雄の英断によって実行された。その方法はかなり強引なものであった。西川は明治七年七月十九日、月山に初めて登っている。西川は月山で一泊し、翌朝七時ごろ、湯殿山に下る。西川は湯殿山に参拝後、また、来た道を引き返す。そして、**「牛が首」から道を右にとり、岩根沢に下る。**出羽三山の登り口は七口あった。その一つに岩根沢口があり、当山派（天台宗）修験道として栄え、やはり神仏混淆寺であった。・・・」
 下線の部分は横道とは明記していないが、ルートの取り方を考慮すればまさに、湯殿山から歩き始め、月山山頂を経由しないで、牛首から横道に入り、清川行人小屋を経由して岩根沢旧日月寺に行ったのである。

○2；戸川安章著「出羽修験の修行と生活」（佼成出版社）P85にも興味深い一節がある。「・・・本道寺からの道者で**横道**を利用したのは関東道者に多い。仙台、福島、岩手の道者で六十里越街道を利用する者は、羽黒派に属する**岩根**

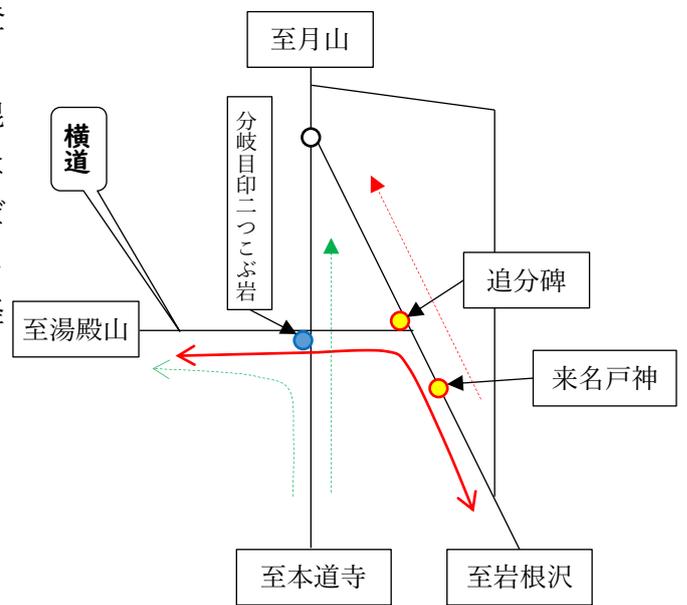


図-5

沢の日月寺一山の宿坊に泊まる者が多かったから、本道寺や大井沢には立ち寄りなかった。・・・
 ー」 「横道」の文字（名称）を使っている。岩根沢道者はまさに図－5において赤色実線ルート
 その向きで湯殿山に参ったということだろう。

この二つの文脈から図－5における赤色実線上の人の移動（往来）のことである。

(2) 歩いた訳ではないが、歴史上の人物の目に入った「横道」のことに触れる。

2025(令和7)年正月4日(土)の新春、布施範行さんから松尾芭蕉の出羽三山参りを踏まえた「横道」の話題が出されたことからの記述である。

岩鼻通明著「出羽三山の文化と民族」(岩田書店/1996・平成8年発行) P96～P99の中から関係箇所を拝借する。松尾芭蕉が「奥の細道」の旅の途中で出羽三山を訪れたのは元禄二(1689)年の旧暦6月のことである。図(表)－6のとおりで随行した曾良の日記と並べて比較して見た。

「奥の細道」	「曾良随行日記」
<p>・・・谷の傍に鍛冶小屋と云有。此国の鍛冶、靈水を撰て、爰に潔齋して劍を打、終「月山」と銘を切て世に賞せらる。・・・岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ばひらけるあり。ふり積雪の下に埋て、春を忘れぬ遅ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかほるがごとし。・・・</p>	<p>・・・湯殿へ趣。鍛冶ヤシキ、コヤ有。 牛首 (本道寺へも 行也)、コヤ有。・・・ <small>岩根沢へも</small></p>
図(表)－6 a	図(表)－6 b

そこで、とても気になるのは曾良日記の**牛首** (本道寺へも 行也) の部分である。ここで直に想起するのが「第3巻－Ⅱ部」に記述した追分碑の刻字「右 月山 羽黒山 / 左 湯殿山 **牛首**」との関係である、ここにも牛首が出て来る、つまり、直覚すれば、その牛首の地と、曾良日記に記述の牛首は同一地であろう、すると、牛首(もう少しピンポイントで表現すると『牛首下』)から本道寺および岩根沢へ行くとなれば、まさしく牛首からの「横道」を指していることになる。元禄二(1689)年の頃には「横道」は開通していたのである。

そこで、さらに発展的関連である。西川町史編集資料 第八号(三) P128～に登場する――第3巻－Ⅲ部/「高・清直路古道」復元(旧道修復)――との関連が出て来る。そこにおいては寛永十六

(1639)年頃に、「・・・ ^{がっさんごえ} 月山之腰手つくしと申処を岩根沢より湯殿山参詣之直路を切開候得共・・・」という騒動に係る記述がある、しかし、「横道」という文字はない。がしかし、そこでも説明したが、本道寺側高清水通りから湯殿山向けの「横道」が完成している中で、岩根沢側がその「横道」に結ぶ直接連絡道を開削しようとした動きに対する本道寺側の問題提起(作業停止要求)であったのである。ならば、逆説的ではあるが、芭蕉が来た1689年より約50年も前の1639年頃には横道は完成していたと見るのが自然だろうと思う。

前記「横道」が歴史上に登場した節目を整理すると図(表)－7のとおりである。

昭和 53 (1978) 年	昭和 49 (1974) 年	明治七年 (1874) 年	大正二 (1913) 年	寛政四 (1792) 年	元禄二 (1689) 年	寛永十六 (1639) 年
国 体	登山案内図	西川須賀雄	国土地理院	湯殿山論争	松尾芭蕉	直路開削騒動
今日 2025(令和 7) 年から 386 (2025-1639) 年前には開削され、 少なくとも、{(1978+1) - 1639} = 340 年間は使われて来た古道である。 しかし、近年、(2025-1978) = 47 年間ほどは使われなくなった。						
図(表)- 7						

(3) まとめ

このように、昔から「横道」は重要な参詣道ルートの一つであったが、近年歩く人が激減し廃れたのはなぜなのだろうか。理由は複数あろうが簡単である、信仰登山の形態がなくなり、月山ピークハントの時代になったからであろう。本道寺口や岩根沢口から入った登山者から見れば、百名山でかつ丸ごと山形県内最高峰の月山を目指すのが目的化したからであろう。また、湯殿山に行くには元湯殿山ホテル側からの交通の便が良くなったことは言うまでもない。また、姥沢からのリフト運行開始も大きな要因となっただろう。したがって、わざわざ本道寺・岩根沢の両口に入って「横道分岐目印二つこぶ大岩」分岐点から「横道」経由で湯殿山を目指す意味がなくなったのであろう。逆に湯殿山お参りをした登山者が、装束場から月山方面に登ったとしても金姥に到着し、そこから里に下る場合、リフト利用で姥沢に降りられることから、金姥から横道に入り、高清水通りを本道寺口に、あるいは、清川行人小屋経由で清川道を岩根沢口に降りる必然性がなくなったからであろう。交通網の発達と共に廃れたということである。しかし、上記のとおり今に至りこの復元が持ち上がっていることは嬉しく思う。

余談であるが最後に芭蕉の記述に触れておく、キーワードは「桜」である。高山に自生する桜の正確な品種は知る由もないが、山桜だろうか。山桜続きで浮かんだのは江戸時代の国学者、本居宣長もとおりのりながが詠んだ有名な次の和歌である、私の大好きな先人の和歌の一つである。

「敷島の大和心を人問はば 朝日に匂ふ山桜花」

一般的には、大和心とは何かと人が尋ねるなら、朝日に照って輝く山桜の花、であると答える、とか、日本人である私の心とは、朝日に照り輝く山桜の花の美しさを知る、そのうるわしさに感動するのだ、などと意識されている。

私が感動する所以は、普通の植物と異なり、まずはいきなり花が咲いてその身を謳歌し、そしてまもなく潔く散る、注目されなくなったその後成長する（光合成する）ための葉を茂らせるのである、人知れず黙々と努力するのである。華々しいのは他より先んず者の一時、後は地道に真面目に黒子に徹する。ところが、私の欲望は長く長く華々しく、そしてピンピンコロリと逝く、しかし、生老病死、そんなに上手く行かないのが人生と自戒している。太く短く（短く太く）生きるのか、細く長く（長く細く）生きるのか、の宿題を授かった思いもする、儂さとか、ワビサビを感じる一面がある。また、芭蕉が見た豪雪帯月山の山桜を思う時、下界・里よりも遅れて咲いたものの、人間（芭蕉）に感動を与えた姿からは、“地道な取組み・研鑽は「継続は力」となりて、大器晩成もいいではないか”などと自身の不甲斐なさを棚に上げて自己保身する強弁も過ぎて来る……。最後は支離滅裂で終わる。

(end)